

三月十八日の死者について

一

わたしは極めて熱狂に欠けた人間であるが、同時にすこぶる冷静にも欠けている。これはたぶん神経衰弱のせいだろうが、一度何か刺激に遇うと、心が乱れて、思考できなくなるしさらに物を書くなど言うまでもない。三月十八日午後わたしは燕大に授業に行った。第四院に着いて外交の請願によって授業は休みだと知ったので、家に帰ろうとしたら、許家鵬君が負傷して逃げ帰ってきたのに出くわし、彼が執政府の衛兵が民衆を銃撃する模様を報告するのを聞いた。これ以後、毎日記事や談話から聞いた悲惨な事実が日を迫うごとに増えていき、心に積もってもう抜け出せず、まるで何もできなくなった。今もう惨殺から五日目になり、みんなが段祺瑞、賈德耀を糾弾し、国民軍に期待する話はすでに言い尽くし、しかもすでに全てが無用のように思われる。このことは却ってわたしの心を落ち着かせ、殺された五十何人かはすべて無駄死にであり、交渉の結果は上海事件よりもずっと悪いであろうことを認めさせた。これはいわゆる国家主義が流行する時代には当然のことかもしれない。だからわたしは徹底的に取り調べ処罰せよなどというたわ言を放り出して、単独で今回の難に遭った死者についていくらか感じたことを言うことができる。——首都での大虐殺の後五日目、このように心静かに話ができることは、わたしの冷静さもまだ少しは残っていることがわかる。

二

我々の死者に対する感想は自ずと第一に哀悼である。どんな死者にであれわれわれはすべてそうすべきであるが、ましてや無辜で殺された青年男女である。ある者は我々が教えたことのある学生である。わたしの哀感は普通次の三点からくる。よく識っているかどうかはまだその次である。すなわち一は死者の苦痛と恐怖であり、二は未完成の生活の破壊であり、三は遺族の哀痛と損失である。今回の死者はこの三点でいずれも極めて重いと云える。だからわれわれの哀悼の意も特に普通の弔問よりも重い。第二は哀惜である。およそ青年の夭折は惜しまれないものはないが、今回は特に惜しまれる。なぜなら病死はまだ自然の成り行きであるが現在の虐殺は人間の行為である。人間の行為が青春を破壊することは必ずしも最も歎惜すべきことではない。ただ主体が自ら放棄することを願ひ、そしてそれによってさらに大きな物を求められさえすれば、恋愛であろうが自由であろうがそれは構わない。数日前茶話の「心中」の中でわたしは、「中国人は生命の重さを知らないようだ、だからいかにして善く生命を捨てるかも知らないし、又何時何処でその命を奪われても愛惜しない」と述べた。今回の数十の青年は有用貴重な生命をもって自主的にではなくくだらない請願の中で破壊された。これはあまりにも残念な事だと思う。わたしはしょっちゅうひとり心の中で夢想する。「もしも彼らが死ななかつたら……」と。実際何度も奇跡への期待と要求を感じた。だが不幸にしてこの明瞭な世界では奇跡は起こり得ないということわれわれはとっくに知っている。——わたしは奇跡を信じることのできない不幸を深切に感じた

のであった。

三

今度の執政府の大虐殺で、不幸にして女師大の学生が二人その場で殺された。楊さんの遺体は病院にあったから、運んで帰ったが、劉和珍さんは執政府の入り口で外に逃げようとして衛兵に後ろから銃で撃ち殺された。だから遺体は執政府にある。ところが執政府はなぜだかその二三十の自らの手で撃ち殺した死体を宝物のようにして、やすやすと人に手渡さない。女師大の教職員が九牛二虎の力を振り絞って、十九日の晩になってやっとの事で学校に運び帰り、大講堂に安置した。二日目の午前十時納棺するので、わたしも行って見た。本当に幸運なことにわたしは傷痕や血衣を見なかった。ただ経帷子に包まれた二人を見ただけだった。ただその他に顔に薄いヴェールが被せてあり、かすかに顔貌を見ることができたが、ふたりとも安らかに莊嚴に眠っているようだった。劉さんはこの半年来宗帽胡同時代から教えた学生なので、顔はよく識っていた。楊さんは識らなかったが、彼女ら二人が並んで眠っているのを見て、思わず可哀想になった。まるでわたしの妹が、——いや、わたしの妹は生きていればもう四十である、まるでわたしの今の二人の娘の姉さんが死んだのを見たようである。彼女らには本当の姉さんはないのだけれども。棺を閉じる時、女子学生たちが声をあげて泣く中、わたしは突然空気が非常に重くなって、みんなの呼吸が少し苦しくなったように感じた。わたしは教職員の中の髪に白髪が混っている人がこの時には涙を流さんばかりにしているのを見た。彼の下顎はブルブル震えて堪えようとしているのだが不可能だった。……

これはわたしが昨日『京報副刊』に発表した文章の一節であるが、劉・楊二君の事についてはもう書きたくないので、この「新聞の文章」を書き写した。

四

二十五日女師大は追悼会を開き、わたしは間に合わせに輓聯を一つ作って送った。文に云う。
死ねば死に切り、二人に門に依る老母と、便り待つ家族親友があることを考えなければ。
生きていたとてどうだというのだ、幾たびも銃声耳を驚かし、弾雨は頭に降り注ぐのに。
殉難者全体の追悼式は二十三日にあった。わたしは夕方になって初めて知り、やはり一聯を作った。

赤化赤化と、学界の名流連中と新聞記者は人が死んでも誣告する。

哲^{ちだじよ}死白死だ、いわゆる革命政府と帝国主義は原はと言えば同じ物。

恥ずかしいことにわたしはどう転んでも「文字の国」の国民、文字でもって死者を記念するしかない。民国十五年三月十八日の五日後。

※初出：1926年3月29日『語絲』第72期